

ブロック 46



ブロック 47



ブロック 48

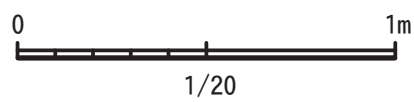
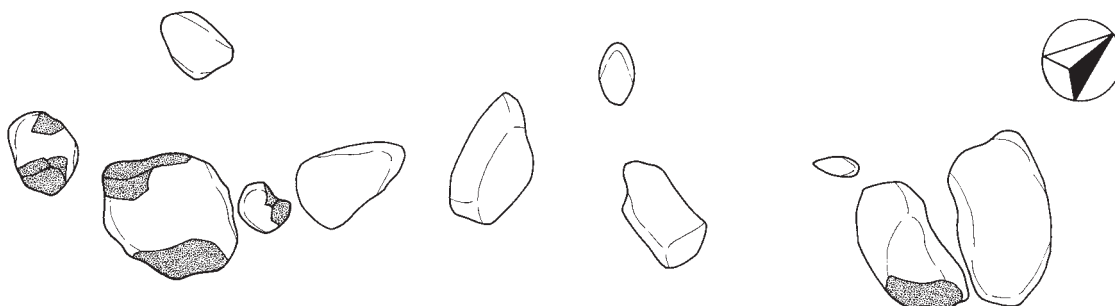
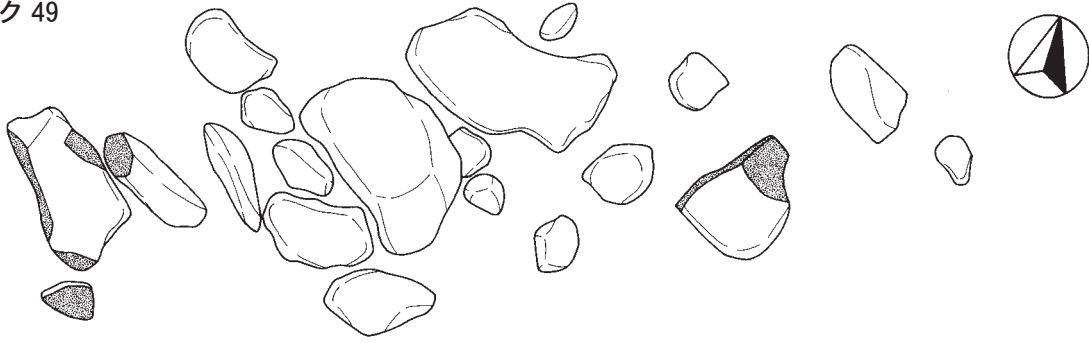


図36 環状列石Cブロック (15)

ブロック 49



ブロック 50

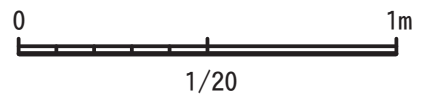
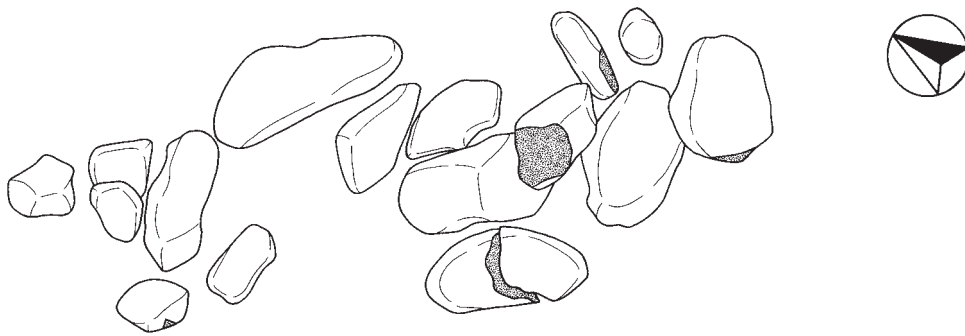
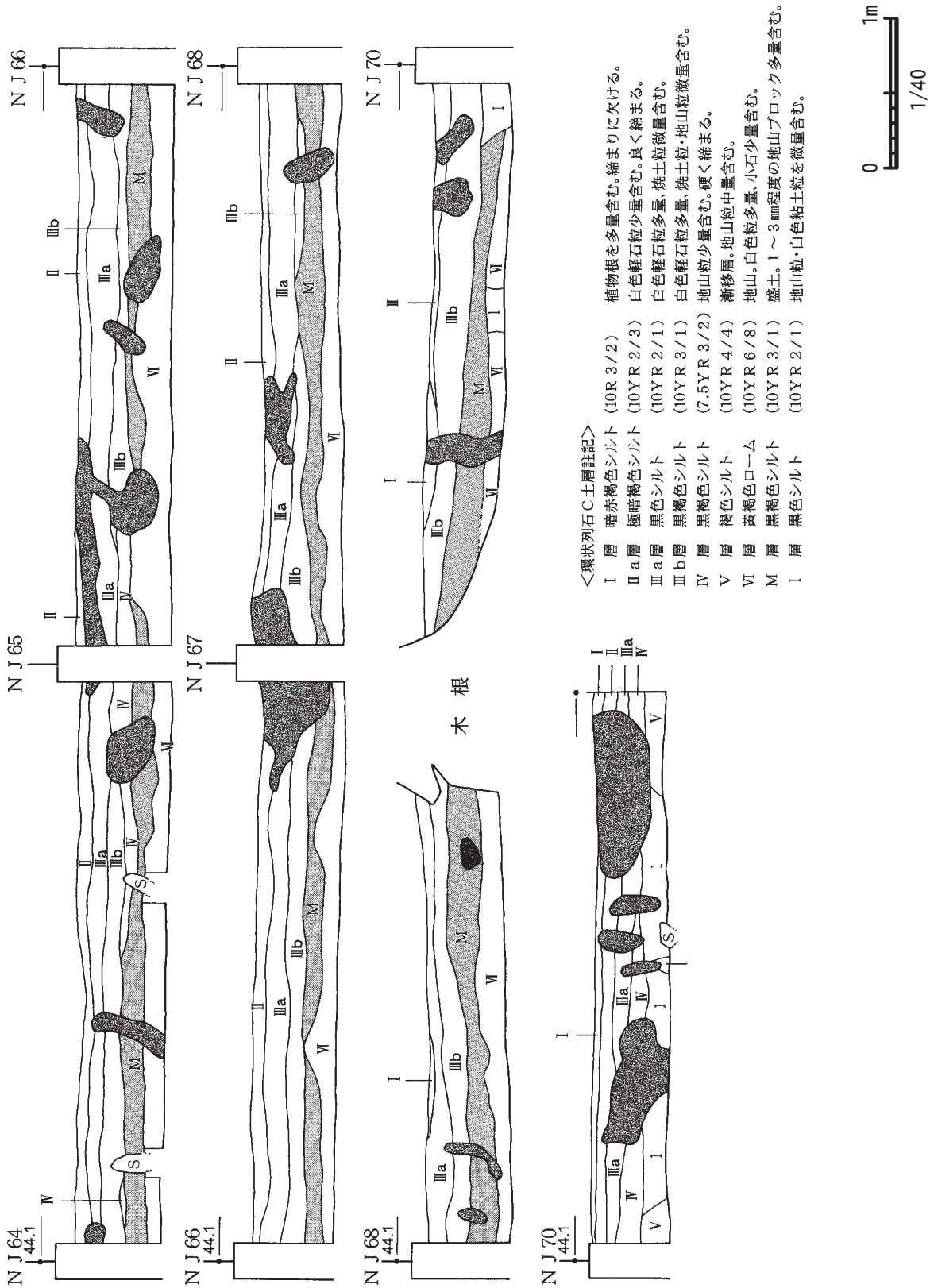


図37 環状列石Cブロック (16)



<環状列石C土層註記>

- I 層 暗赤褐色シルト (10R 3/2) 植物根を多量含む、締まりに欠ける。
- II a層 極暗褐色シルト (10YR 2/3) 白色軽石粒少量含む、良く締まる。
- III a層 黒色シルト (10YR 2/1) 白色軽石粒多量、焼土粒微量含む。
- III b層 黒褐色シルト (10YR 3/1) 白色軽石粒多量、焼土粒・地山粒微量含む。
- IV 層 黒褐色シルト (7.5YR 3/2) 地山粒少量含む、硬く締まる。
- V 層 褐色シルト (10YR 4/4) 漸移層。地山粒中量含む。
- VI 層 黄褐色ローム (10YR 6/8) 地山。白色粒多量、小石少量含む。
- M 層 黒褐色シルト (10YR 3/1) 盛土。1～3mm程度の地山ブロック多量含む。
- I 層 黒色シルト (10YR 2/1) 地山粒・白色粘土粒を微量含む。

図38 環状列石C土層断面図

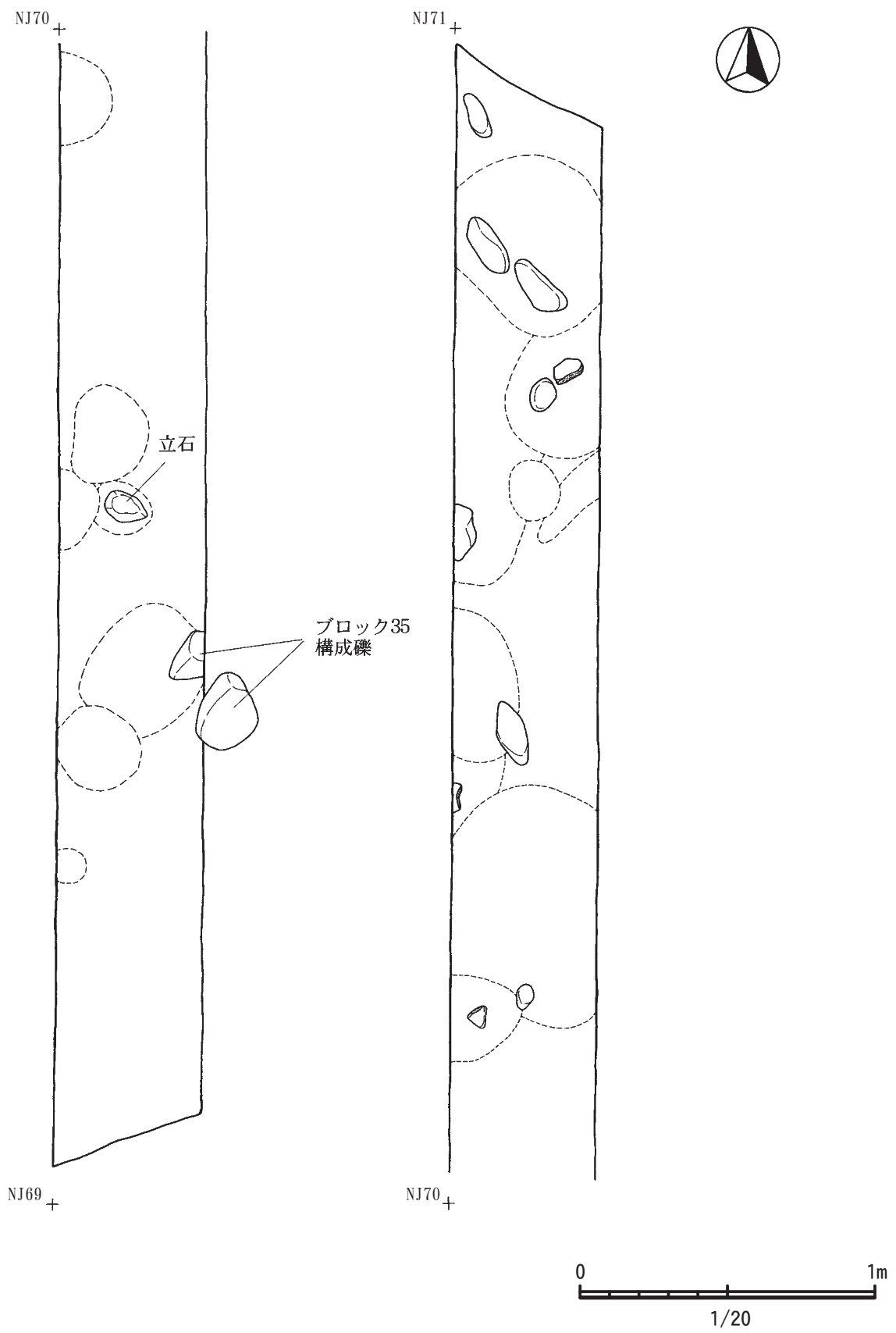


図39 環状列石Cサブトレンチ内の遺構プラン



図40 環状列石Cにおける配石遺



### (1) 配石遺構

環状列石Cの周囲から6基の配石遺構を検出した(図40)。

環状列石C外周で掘立柱建物跡が検出される部分から4基検出している(図41)。6SQ02・03、9SQ04の検出面は環状列石と同じレベルである。これらの構成礫は被熱を受けている。形態も石囲炉に近いことから、第15次調査では6SQ02の周囲を調査し、ロームブロックを含む盛土層や多くの柱穴を確認したが、6SQ02と掘立柱建物跡との関連性はうまく掴めなかった。同様な遺構としてSN228がある。これは石囲炉で、6SQ03・9SQ04は配石内部は未調査であるが、上記の2基を考慮すれば、石囲炉の可能性が高い。

13SQ408は環状列石Cより西に28m離れたグリッドOB61で検出された(図42)。四隅が立石である方形の配石遺構で、南西部分を土坑で壊されている。配石を横断するようにサブトレンチを設定し掘り下げたが、焼土層や下部土坑は存在しなかった。推定径2.4mと上記の石囲炉とは異なるものと考えられる。

9SQ05は直径約4mの円形状配石遺構である(図42)。隣接する9SK08によって半分ほどが破壊されていた。下部に土坑は伴わなかった。

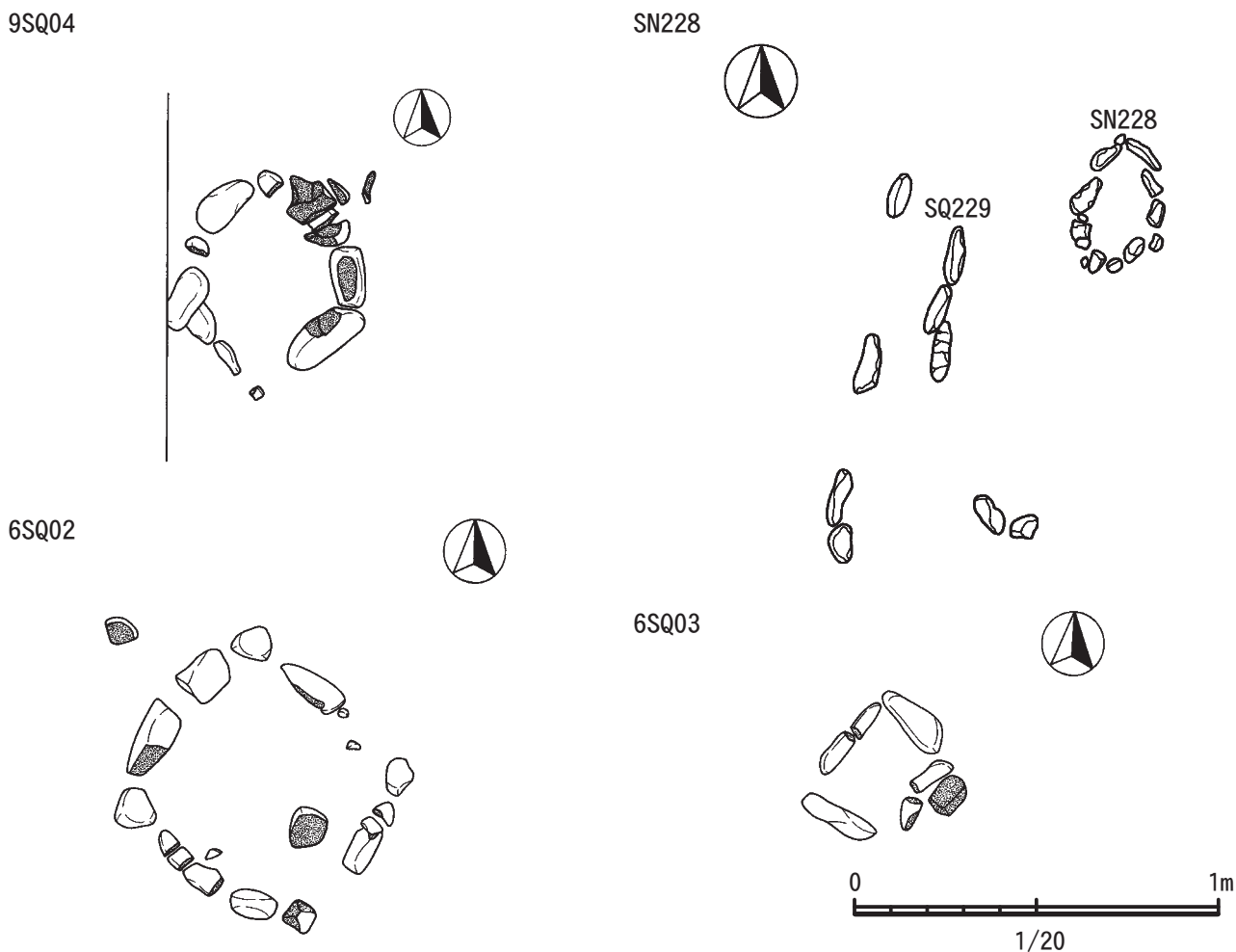
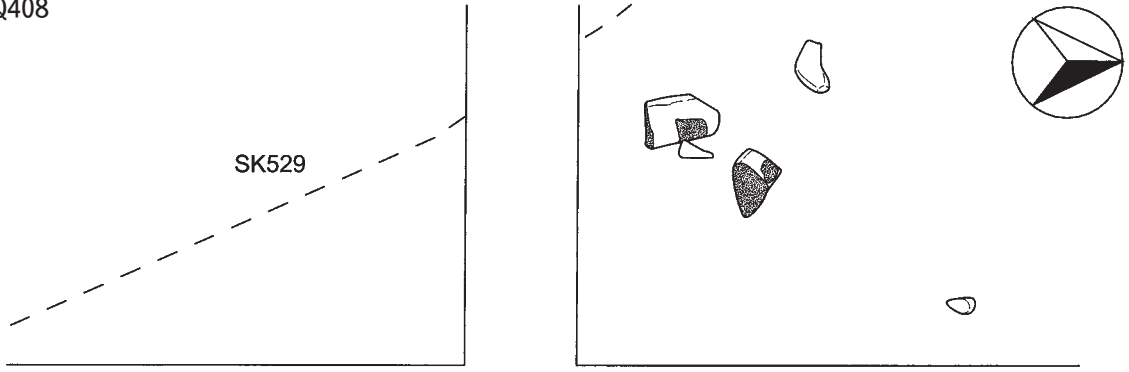
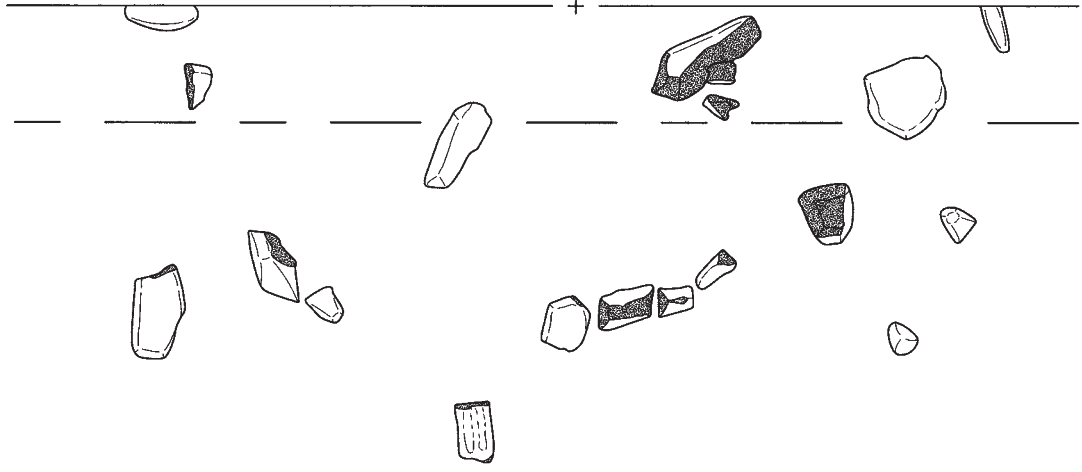


図41 環状列石Cにおける配石遺構平面図(1)

13SQ408



OC62



9SQ05

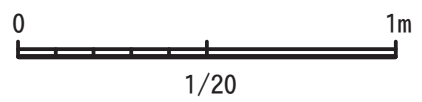
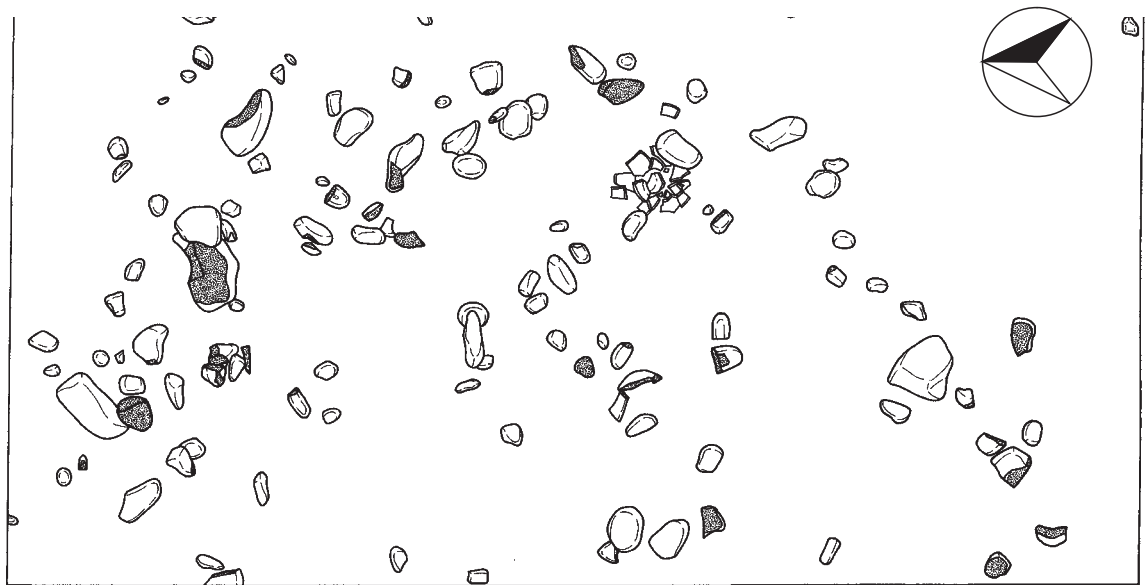


図42 環状列石Cにおける配石遺構平面図(2)



## (2) 掘立柱建物跡

これまでに25棟の建物跡が検出されており(図43・表4)、4つの環状列石の中でもっとも多い。形態はすべてが6本柱である。以下、分類ごとに記述する。

第1-1類の建物跡は14棟を数える。最小のものは「SBな」で長軸長3.2m・長辺長3.8m・短辺長2.2m、最大のものは「SBさ」で、長軸長6.0m・長辺長6.2m・短辺長4.2mを測る。

第1-2類は8棟を数える。最小のものは「SBし」で長軸長2.8m・長辺長3.9m・短辺長2.8m、最大のものは「SBそ」で、長軸長4.2m・長辺長4.8m・短辺長3.9mを測る。

第3類に分類できるものは3棟を数える。代表的な遺構は13SB406で、環状列石Cより西側に位置する。長軸長4.8m、長辺長4.4m、短辺長は4.2mである。6本柱(13P442・13P460・13P462・13P543・13P545・13P546)で、柱を結ぶように礫を置き、建物の中心に地床炉(13SN547)を配置している。地床炉は長径0.7m、短径0.5mを測り、整地層から掘り下げており、中心部がやや強く焼け硬く締まっている。

13SB406は第12次調査のハンドボーリング探査の成果で配石遺構と予想し調査を進めたものである。しかし、構成礫に不自然な間隙があり、その周辺の堆積土には炭化物などの混入が認められたことや、配石の中心部分に焼土跡を検出したことから、さらに掘り下げを進めたところ、配石の間隙に柱穴が配置することがわかった。柱痕を避けるように配石を配置していることや、柱の掘り込み面の直上に、配石を構築していることから、建物の柱を建てた後に配石を巡らせていたことがわかる。柱穴は6基あり、その配置は亀甲型を呈することから、この配石遺構は掘立柱建物跡の一形態であると判断した。構成礫はどれも人頭大くらいの大きさで、一部は他の遺構に破壊されているが、直径6×4mの方形を呈するものである。周辺のハンドボーリング探査の成果(図7)と照らし合わせると、この建物跡から環状列石C本体に向かって配石列が延びている。配石内側で建物跡の床面に相当する部分では、基本層序には対応しない地山ブロックを含む黒褐色土が基本層序Ⅲa層とⅣ層との間に形成されている。地山まで浅い南側ではⅣ層や地山漸移層であるⅤ層が失われている部分もあることから、地山まで削平し、造成土で平坦面を形成してから建物を構築したと解釈できる。

同様な建物構造とみられるものは環状列石Cの北西部で検出されている(図47)。6SQ01は外帯2と開口部で連結しており、配石で柱穴が配置すると思われる部分には間隙が存在する。

さらに13SB406と隣接する13SB570も配石を伴う第3類の可能性はある。南半分は未調査であるが、やはり柱穴間に礫を配置している。なお、建物内側から三脚石器が2つ出土した。

建物跡を構成する柱穴の多くは基本層序Ⅲ～Ⅳ層から掘り込んでいる。

柱穴の堆積土には、柱痕跡を明瞭に残すものと、柱穴覆土が大きく崩れた形跡が認められるものの2つに分類できる。特に後者は、柱の抜き取り痕(秋田県教委1999)を伴い、覆土は大きく乱れる傾向がある。代表例として、掘立柱建物跡9SB02を構成する9P36で、このような抜き取り痕をもつ柱穴は建物跡の重複が激しい環状列石AやCに多い。また、抜き取り以外の廃絶行為には、柱穴内に礫や土器片を挿入するものも認められる。

No.	遺構番号	分類	棟方向	長軸長(m)	長辺長(m)	短辺長(m)	重複	備考
1	SBさ	1-1	南	6.0	5.2	4.2	有	
2	SBし	1-2	南	2.8	3.9	2.8	有	
3	SBす	1-1	南	-	3.0	2.9	有	
4	SBせ	1-2	南	3.7	3.7	3.7	有	
5	SBそ	1-2	南	4.2	4.8	3.9	有	
6	SBた	1-1	南	5.8	5.8	5.2	有	
7	SBち	1-2	南	4.0	4.2	-	有	
8	SBつ	1-1	南	5.0	4.9	3.8	有	
9	SBて	1-1	南	3.8	4.6	3.0	有	
10	SBと	1-2	南	3.5	4.0	3.5	有	
11	SBな	1-1	南	3.2	3.8	2.2	有	
12	SBに	1-1	南西	4.2	4.2	3.6	有	
13	SBぬ	1-2	南西	3.2	3.4	-	有	
14	SBね	1-1	南西	4.2	3.2	3.2	有	
15	SBの	1-1	南西	4.4	4.2	3.5	有	
16	SBへ	1-1	南西	4.5	4.4	4.0	有	
17	SBほ	1-2	南西	3.8	4.1	3.8	有	
18	SBま	1-1	南西	4.4	4.2	3.0	有	
19	SBみ	1-2	南西	-	-	-		
20	9SB01	1-1	西	4.2	3.8	3.6		
21	9SB02	1-1	西	3.4	3.4	2.8		
22	9SB03	1-1	西	-	-	3.8		
23	6SQ01	3	南東	-	-	-		
24	13SB406	3	東	4.8	4.4	4.2		
25	13SB470	3	東	-	-	4.2		

表4 環状列石C掘立柱建物跡

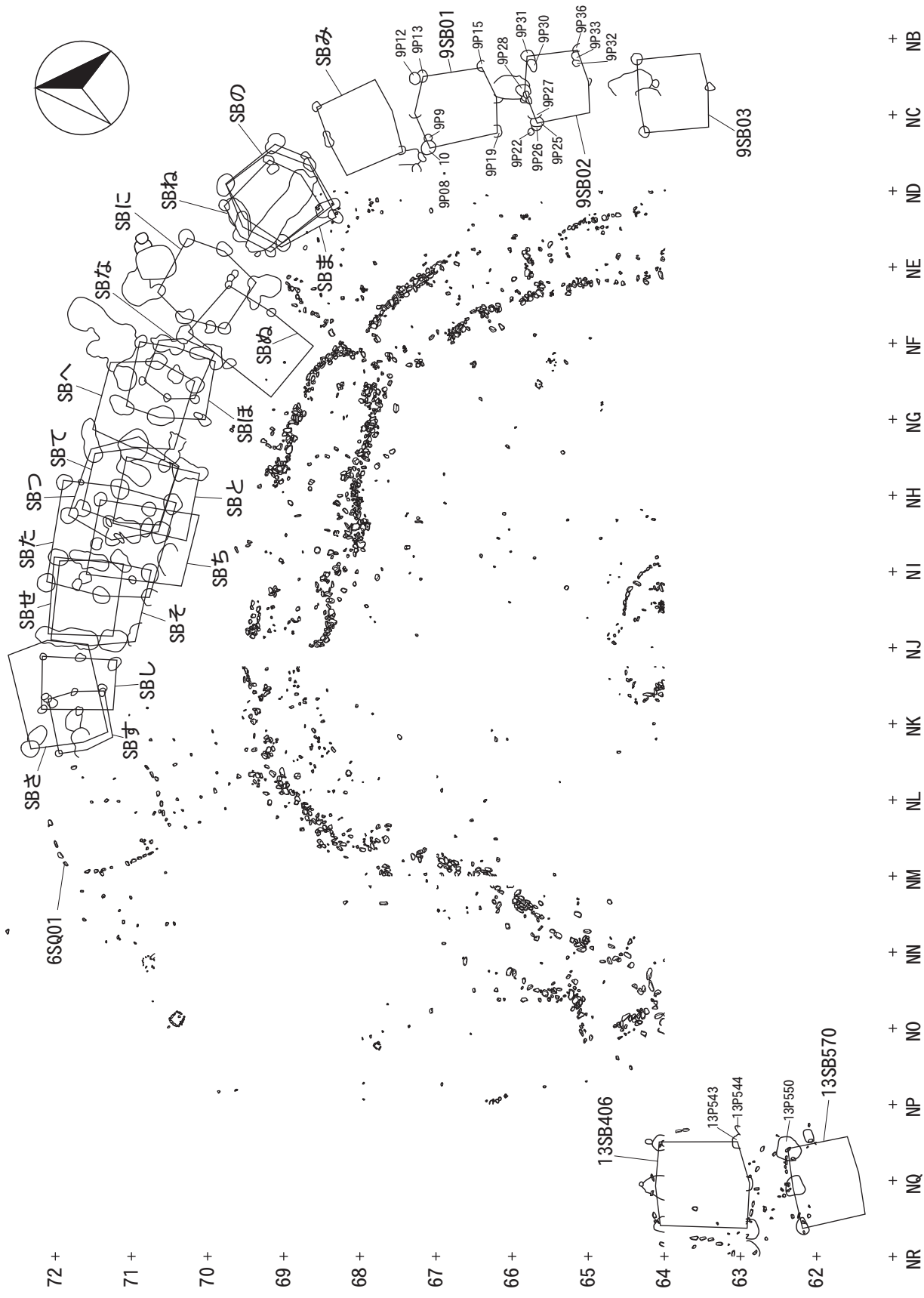
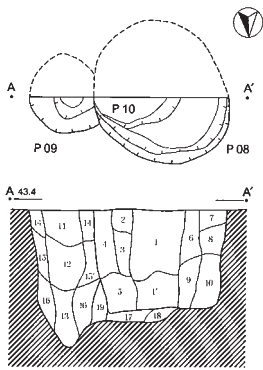
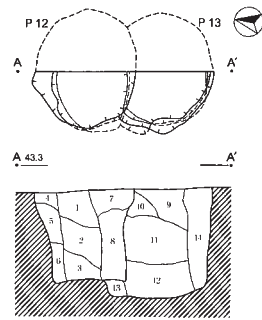


図43 環状列石C掘立柱建物跡分布図

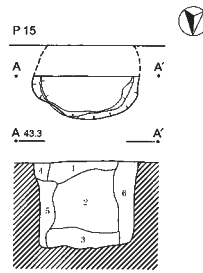
9P08 ~ 10



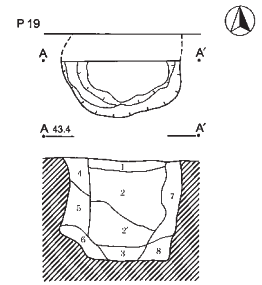
9P11 · 12



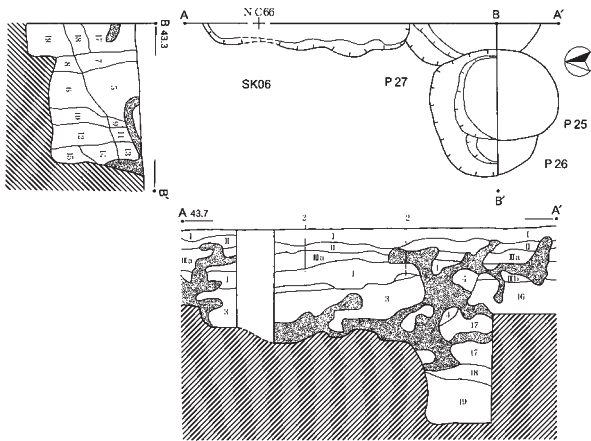
9P15



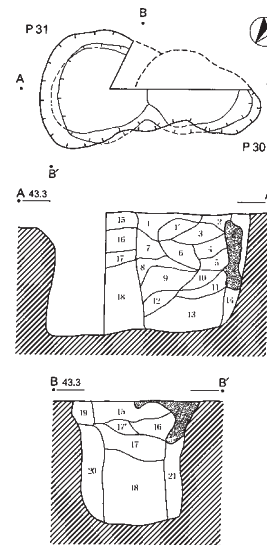
9P19



9P25 · 26



9P30 · 31



9P32 ~ 36

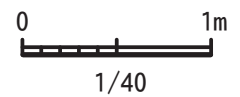
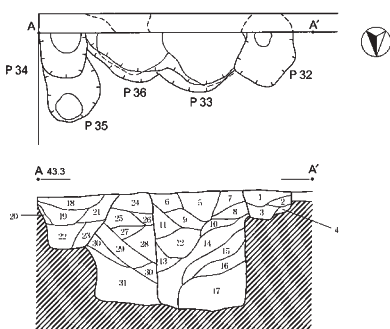


図44 掘立柱建物跡の柱穴

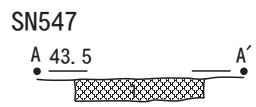
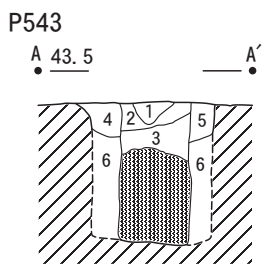
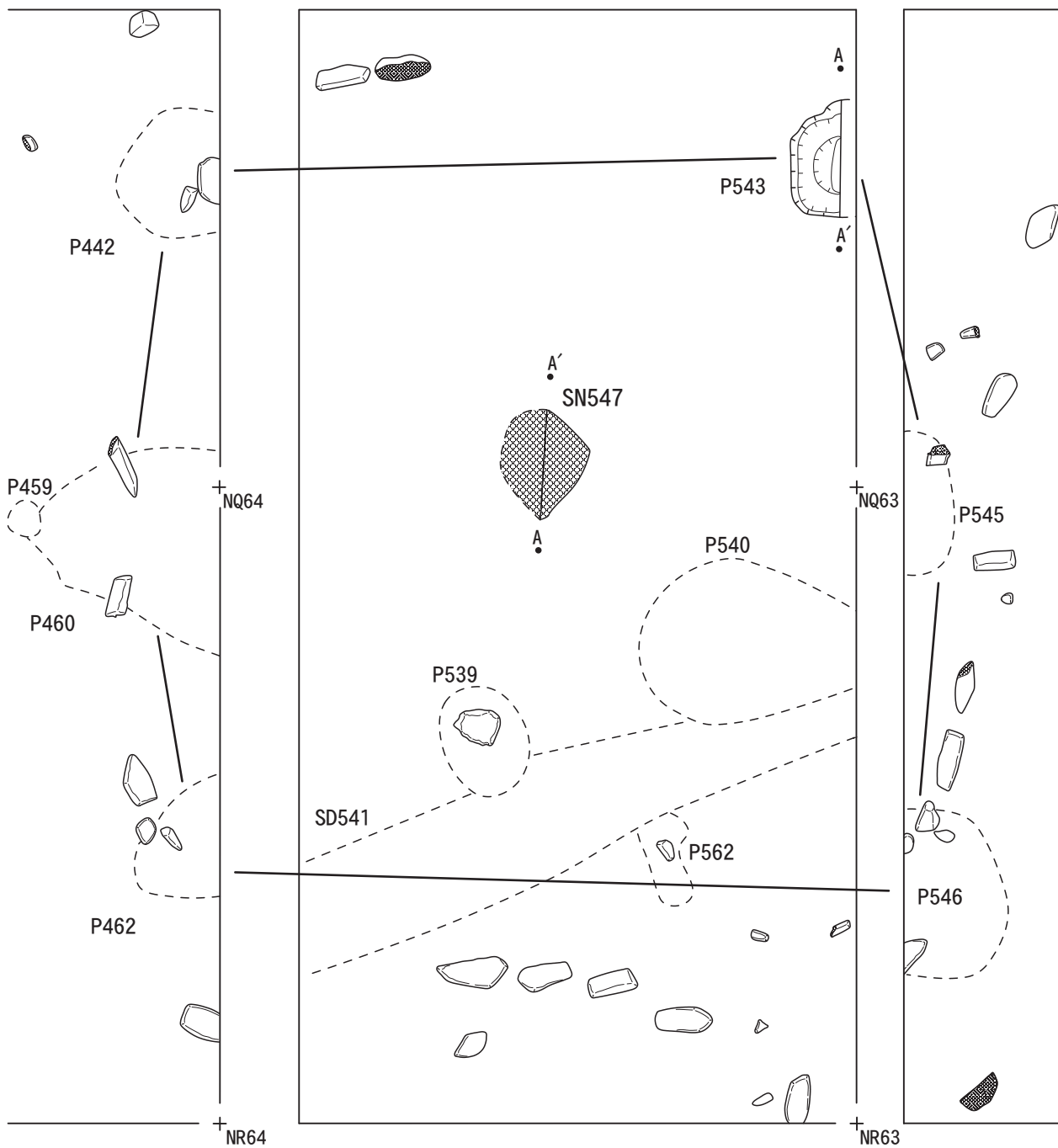


图45 13SB406 平面图



图46 13SB570 平面图

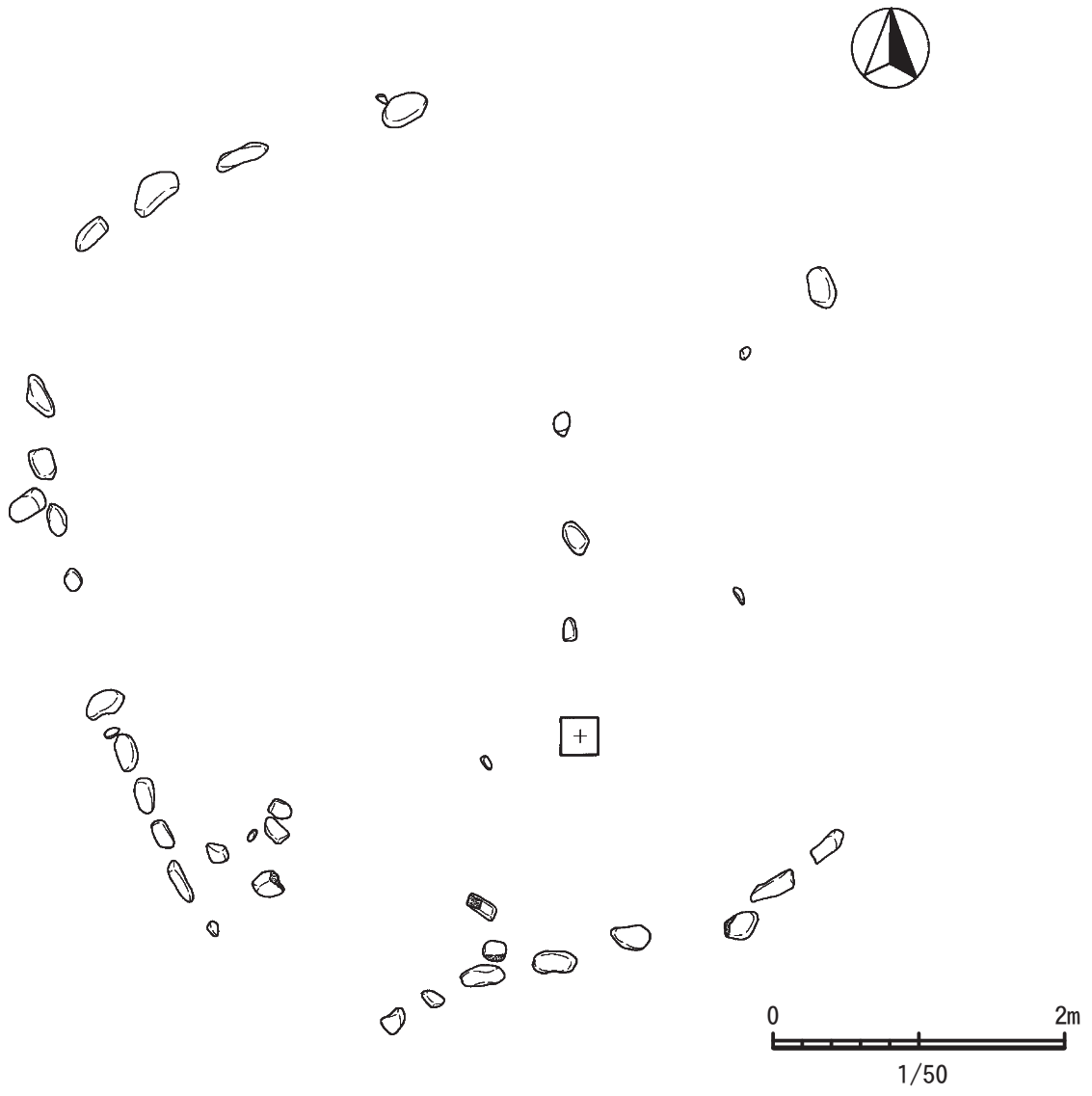


图47 6SQ01 平面图